

---

# 高校同好会!!

咲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

高校同好会！！

### 【Nコード】

N6661A

### 【作者名】

咲

### 【あらすじ】

私、優砂こと伊那丘優砂イナオカユウサは高校にはたくさんイメージを持っていた。…恋…友情…部活しかし高校はそんなあまいところじゃなかった！！解決しても解決しても飛込んでくる事件！！！！もー私いたいどうすりゃいいのッ！？

## 高校Ⅱ恋

あか

あかい。まっかな夕日が見える。

日の暮れた夕方。あなたはまっかな夕日を背に笑ってる。

五月。暖かい風が窓から入り優砂の髪をなでる。高校に入学して約一カ月。だいぶクラスにも慣れて、クラスメートの顔と名前も一致してきた。

「…寒。」

カーディガンを着ていないからだろうか。ふと肌寒さを感じ窓を見た。…目があった。

あの人…名前なんだっけ…あ、また外向いちゃった。

優砂の席から左に7つずれた席に座る男の子。時々目が合うが目が合うとすぐにそらしてしまう。

優砂は前を向き授業へと戻った。

「優砂アお腹減ったよ。なんか持ってない??」優砂の前に座っていた夏菜穂が振り向いて聞く。「んーガムならあるよーいる??」

「あー!!いる!!何味??」

「んとねエ、桃だよ」

「桃ー??珍しいねえ」

「今日コンビニで見つけたんだあ」

と平凡な会話をしていると「一枚」

誰かが単語でガムを要求してきた。

「…兎神君。せめて”下さい”トカ”ちようだい”トカ言おうよ…」

「うつせえな」

面倒くさそうに返答をする。しかし兎神君もお腹が減っているのか

ちやつかり右手を差し出している。

「…はいはい」

しよугがなく優砂は右手にガムをのせてあげた。

鬼神君は素早く包装を解き口にガムを放りこんだ。…お礼もなしですか？？

「剣 - お前も食つかあ？？」

剣？？

「あ - いる - 」

剣と呼ばれた男の子が鬼神君の後ろから出てきた。…背は160ちよつとの小柄な子。体の大きい170ぐらいの鬼神君とは正反対な感じの男の子だ。

「ええツと…??」

「榊。榊劍…何味??」

「も、桃…」

桃の甘い香りがした。

「おーい。席つけー」

古典の木村先生の声で私達みんなは席へと戻った。なんだか顔が暑かった。

こんな時こそ窓は開いてないかと窓のほうに目をやった。

…目があった。

また外に向いてしまおうかと思ったが榊君はにっこりと笑って小さく手をふった。

(なんだろ…めっちゃ暑い…)

暑くてぼーっとなった頭では手をふり返すだけしか優砂にはできなかった。

「優砂今日バイト??？」

「違うよ。甘菜かんなは??？」

「うちも今日休み。どっか遊び行こッ」

「ん、いいよ。」

甘菜は小学校から同じで中学の部活も一緒にバレー部だった、仲良しだ。この二人が遊ぶ場所はたいてい決まって、ファミレスに行く。

放課後。甘菜と共に学校近くのファミレスに向かった。

「ドリンクバー二つ。」

ドリンクバーのみを頼んで約3時間はここに居座る。会議ト力ではない。ただ普通に今日あったおもしろい事。むかついた事を話すだけ。……だった。いつもは……。

「~~~~朽木君がまち転んだッてわけッ!!」

「えーまちうけんだけどッ!!……」

「ん??どしたあ??？」

「実は今日さあ……」

優砂は今日あった事を話した。そして最後に呟いた。

「……なんで……体が熱くなっただら……」

しばしの沈黙。

「……甘菜??？」

「……それってさあ……」

ゆっくりと俯いてた顔をあげて言った。

「恋……ぢゃない??？」

「……恋??？」

甘菜から思ってもいなあった言葉が返ってきた。

思わぬ甘菜の言葉から私の恋が始まった。

## 高校〓寝不足??

(これが…恋なんだろうか…) 私は中学の時、恋というものをしていなかった。

「これが一目ぼれッてやつなのかなあ…」

今日初めて10秒以上顔を見て。初めて名前を知った。なのに好きになっっていた。

(こんなんでいいのか…??恋ッて…) でも榊君の事を考えると顔から火がでるほど熱くなる。もつともつと彼の事を知りたいと思っってしまう。…やっぱりこれッて恋なのかな…??と優砂は考え続けた。そして考えているうちに優砂は眠りについた。

「…おはよ」

「おはよー……ッて!!優砂!?どしたの!?!そのクマ!?!」

「ハハ…ちよつとねエ…」

眠りについた。といつても意識が飛んだのは午前3時過ぎ。寝不足になるのは当たり前だ。

優砂はポケットから小さな鏡を取り出した。

(あ-まちだ…クマやばいや。) 右手で何をしてても消えないはずのクマを気にしているとそこに聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「おつす」

(…さ、さ、さ、榊君だあああああ!!)

「お、おはよ」

突然の事で少し声があがってしまった。

「ん??クマどしたの??」

あなたの事を考えていて眠れませんでした!!  
…なんて言えるわけがない。

「ちよつと、ね、眠れなくて!!」

「不眠症かア??」

口に軽く手を当てて笑った。

「羊を数えるといいぞ!!」

屈託のない笑顔を見せて、優砂の前から去っていった。

(…甘菜。)手を組んで舌を見た。

(あんたの言った通り、私は恋してしまったようですっ!!)

「1、笑顔を見てキュンってなった。

2、話しかけられてテンションあがった。

3、もつと…しゃべりたい…と思った。これが恋してるかどうか見極める方法よ!!」

と昨日甘菜が言っていた。

…全部当てはまりましたよ。

それから私は気付くと榊君の事を目で追っていた。

でも…それがいけなかったんだ…。

昼休み。私は夏菜穂と鈴と由海の4人でお弁当を食べていた。

そんな時に事件は起こった…。

「…あのさあ」

「んー??何??鈴。」

「優砂ツてさ…好きな人。いるでしょ。」

「ブホッ!!」

ビックリしすぎて飲んでいたピーチティーを吹き出してしまった。

「え!!え!!?なんで!?!」

「あーその反応…やっぱりいるんぢゃん!!」

「…ッ。」

まあ黙っていれば誰かまではバレないと思って、また口にピーチティーをふくんだ。

「あとね…」

「ん??」

今度は由海が口をひらいた。

「好きな人ツて…榊君でしょ…??」

「ゴホッ!」

またまたビツクリしすぎてピーチティーを吹き出してしまった。

「な、なんでツ!」

「だっていつも目で追ってるしさア」

夏菜穂まで…!!

「そ…話してる時、顔赤いしテンションも高いしねエ」

…バ…バ…バ…バ…バ…バ…!!

「…そんなわかりやすい…??」

「うん。」

3人、口をそろえて言う。

「でもさあ…優砂、水臭いよ!!うちら友達なんだから相談くらいしてよ!」

「うう…ごめん…」

「まあ今日からはどんな事でもうちらに言って!!協力するカラさ

」

「う、うん」

なんだか照れて顔が真っ赤になってしまった。

## 友情<恋心？

榊君を好きになった。

ということを認めてしまった、今。

…意識しすぎてまともに話す事もできない!!

話せないのならせむてメールしたいなあ…と思うこの頃である。

でも聞けっこない!!まともに話しもできないのに…

そして、またこの小さな悩みを誰にも話せずに心に秘めていた。

休み時間、優砂は鈴と廊下の休憩スペースにある、ベンチに座って缶ジュースを飲んでいた。

「だんだん暑くなってきたねえ」

「そうだね……!?!」

いきなり会話が止まる。

優砂は緑の観葉植物に隠れつつただ一点を見つめていた。

そこにはもちろん榊君。

(アド聞きたいなあ…)

という、気持ちだけが今優砂の心には、込み上げられていた。

(でも聞けるわけない…)(唇をかみしめた。

しかし、次の鈴の行動は優砂にも理解できなかった。

「榊くうくん！！アド交換しよおお」

こいつ何言ってるんだ！？思わず

「こっ」という言葉まで出てくる。

しかし優砂は気付いた。

（そっか！！ここで鈴が優砂にも話題を振って一緒に交換するって  
事かあ！！）

優砂は待った。

鈴が自分に話題を振ってくれるのを。

でも鈴は優砂の方を見ようとしなない。

楽しそうに赤外線を向け合い、笑っていた。

優砂は、ただただ二人がアドを交換するのを見ていた。

「ッぢゃ！！帰ったらメールすんねえ」

「おう！」

鈴が会話を終えて振り返る。

（きつと『自分カラ話題に入って来てよ』とか…言っよね？）

沈黙が苦しい。

「教室帰ろっか」

裏切られた。

アドなんかどーでもいい。

なのに…なんでこんなに苦しいんだろっ…

放課後になる。

「優砂っ！！バイバイっ」

「…う、うん！！」

普通に話してる自分が怖い。

本当なら怒り狂ってる。

自分の気持ちを知っているのに。

わざわざ目の前で、アドを聞く。

そんな行為許せない。

…でも何故か今は

怒りよりも悲しみが多いんだ…。

『裏切られた』

そんな言葉が頭でグルグルとまわっている。

「優砂??…なんかあったの?」

顔に出たのだろうか…

心配そうに由海と夏菜穂がのぞきこんで優砂に聞いてきた。

「…由海い…夏菜穂お…」

今日一日溜め込んでいた苦しみがあふれた。

苦しんでいた理由を早口で話した。

二人はただ真っ直ぐに優砂を見ながら話を聞いた。

「…なにそれえ…!?!」

「意味わかんなくね!?!」

話し終わるとまるで優砂の身になったかのように、話し始めた。

「まぢ不明!!なんで優砂の気持ち知ってるのに…そんな事すんの  
っ?!?!」

「どーする!?!今、電話して聞いてみるッ!?!」

「…もしかして好きなのかなあ…?!?!」

「それはない!!」

二人そろって否定の声。

「…え…?なんで…?」

かっこよくないから?と不安そうな声で聞く。

「違うよ!!鈴は好きな『人には即コケる!!』が鉄則じゃん??」

「だからアド聞く。なんてまどろっこしい真似しないよ」

「安心しな!!」

二人の優しい声。

さっきまであった苦しみが消えてきた。

「…うん…!!ありがとう!!」

「良かったよ 元気になって!!」

「じゃっ!!!!うちら部活行くね」

二人は部活に行く為に去って行った。

教室はもう優砂だけ。優砂のクラスで帰宅部の人ほとんどいない。

そのため優砂は放課後一人の事が多いのだった。

「もうちょっとシフト増やそうかなあ」

一人は寂しい。

だからバイトを増やそうかな？

と呟いているとそこに

「あれ？まだいるの？」

…榊君。

「う、うん！！」

また急の事で声が大きくなってしまふ。

「ハハツ、お前はいつも元気いいよなあ」

ドキドキしていた。

…笑顔…。

だけじゃない。彼はバスケのユニホームをきていた。  
その事にもドキドキしてしまっていた。

「バスケ部なんだねっ！？」

「オウ…でも…」

笑っていた顔が曇るのがわかった。

「…でも？」

「正直やめてえんだよなあ…」

突然のカミングアウト。

「ええ！？なんでっ！？」

「実はさあバイトしたいんだよ」

チャンス…。

これはチャンスだった。

「ええ！？バイト！？」

「やっぱり遊ぶ金トカ欲しいじゃん？？」

「だよねえ！！バイトはいいよーお小遣いいっぱいだよー！！」

「え？？バイトやってんの！？」

「やってんるよあっ！！」

「何？？何やってんの！？」

「……パン屋……。」

「プツ！！似合わねえな！！」

「ヒドッ……」

「うそうそ！！怒んなよ！！」

「怒ってないですー！！」

楽しい時間は短くて感じる。

というのは本当だった。

10分くらいの出来事が1、2分くらいに感じた。

「…ッと…。そろそろ行かなきゃやべえな…!!」

「そっかぁ…。まだ部活中だもんね…」

「やっぱり伊那丘ツッて面白いな!!」

「えっ!?!そっ??.?」

「最初、話しくいかなど?思ったんだけど、面白くて最高!!」

今の優砂にとってこれこそ史上最高の褒め言葉だった。

本来の目的であるボールをいったん優砂を置いて教室の隅に取りに行った。

そして優砂は考えていた。

……アド知りたい。

今の流れからいけば簡単な事。

一言いえばいい。

勇気をだして一言。

でもその勇気が優砂には出す事ができなかった。

ボールをとって彼は優砂の前に戻って来た。

「ぢゃっ!! 行くな!!」

「うん!!... 頑張つてねっ!!」

心とは裏腹の笑顔で彼をみおくる。

教室から彼の姿が消えて行く。

それと同時に後悔の渦にまきこまれる。

「はあ...」

深い溜め息。

「どした!? 溜め息ついちゃって!!」

「ええ!? 榊君!？」

さっきみおくったばかりの榊君がまた目の前にいる。

「え? なに? 部活は?」

「いや、いい忘れた事あつてさあ!!」

「ん? なに?」

「アド教えて!？」

... もう天国いってもいいかも...

## メール×思い(前書き)

最近私の恋も発展中

やっぱり高校が大変です( \* v □ v ) b q / \$ 笑

メール×思い

チャーラチャララー

レミオロメンのスタンドバイミー。が流れた。

「〜来たっ!!!」

受信メール：榊 剣

今日の放課後アドを聞かれた時は幸せの絶頂だった。

しかし今、優砂はその絶頂を超えたさらなる絶頂だった。

あの後、家に帰ってメールをしようか考えていると向こうカラメールが来たのだった。

『やっと部活終わった』

これが一番最初のメールだった。

『おつかれえ ㄹ何やったの、3、( /?』

星や顔文字をつけ明るくメールを送った。

…しかし彼は…

『シューティングと走り込み』

…丸も無し…。

そして短文。

これが彼なりのメールなのだろう…

これはこれでカッコいいかも…

ト力思っちゃったよ…

『走り込みい〜??バスケってちょー走るよねえ ( (ノ』

『永遠に走ってる』

…文章自体はおもしろいし、もうメールできている事だけで優砂は十分満足だった。

…でも…

遅い!!異様にメールの返信が榊君は遅い!!

20:15に送信!!

…20:36に受信…

この間は何ッ!?

ふと昼間の不安がよぎった。

『帰ったらメールすんねッ』

鈴の言葉。

もしかして鈴とメールしてるから???  
だから遅いの???

そんな事を考えるだけで胸が痛かった。

…でも鈴は大切な友達だから…

嫉妬なんかしちやいけない。

友達だから…

チャーラチャララー

『てかお前って家どのへん？』

『西学町一丁目だよ（ > A・（ / 榊君わあ？』

『えっ！？まじ！？…俺もなんだけど…笑』

『うそお！？えっ！？ぢやあ仲美納公園なみな知ってるッ！？』

『知ってる！！めっちゃ家近えよ！！じゃあ蓄スーパー知ってる！』

『うちも近いよっ！！うちら近所ぢゃん！！ワラ 蓄スーパー！！知ってる 潰れたよねえ ワラ』

『すっげえ偶然だなあ！！笑』

また新たな新発見…

家が100Mもない…という事。

『え？ぢやあ中学は？』

『川崎の私立。親に行けって言われて毎日電車で通ってたんだよ』

『えーまぢウケンねっ』

『うけねえよ（笑）』

こんな短文でたわいもないメールが楽しかった。

心のどこかで不安を持っていても、榊君の短文で愛想もないけどどこか優しさのこもったメールが優砂の不安を書き消していった。

そして夜はふけ、メールは自然な流で切れた。

夜。

頭から離れない。

メールの文が。

声が。

笑顔が。

もっともっとあなたを好きになってしまったかもしれない。

「へえメールしたんだあ！！」

「しーっ！！聞こえちゃうからっ！！静かになっ！！」

メールをした事をこっそり夏菜穂に話した。

「でも良かったねえ 進展早いじゃん！！しかも家近いとかいって  
どんだけだしっ」

「それはうちだってビックリだよ」

…でもね…

優砂と家が近いつて事は…

鈴とも近いつて事なんだよ…

なんだかまた不安だよ…。

チャララ〜チャラララ〜

SAKURA。

そのメールの受信音は鈴からだった。

内容は…

『今から花火しない！？』

現在の時刻。

21:23。

優砂の親は厳しい。

こんな時間に出してくれっこない。

『ごめん 親が出してくれないや（<―>）』

残念だけどまた今度。

と携帯を閉じた直後だった。

ピルリラ ピルリラ

メール…ではなく着信だった。

着信：岩岬 鈴

「えっ！？電話！？……はいっ！！もしもしっ！？」

『ちよつとお！！親なんか無視、無視！！』

『いやぁ無理だから！！』

『…榊君もいるよ？？』

『え？』

『仲美納公園に50分ね』

『え！！？ちよつと…！！』

『ツーツー』

わけの分からないまま切られてしまった。

優砂が気になったのは一言。

『榊君もいるよ』

急いで髪をとかして、あたためたアイロンでセットした。

服はお気に入りのドットのキャミ。

…もしかしたら鈴の冗談かもしれない。

だけどそのもしかしたら…があるから服も髪も完璧だ。

親には…

「友達の教科書間違えて持ってきちゃったから返してくる!!」  
とまで嘘をついた。

52分。

すでに仲美納公園には2人がいた。

「おつせえよ!!笑」

「おつかれえ」

榊君の笑顔…

こんな夜に見れて最高だ…。

…でも鈴…。

もしも優砂が家出れなかったらどうしたの？  
2人で花火やったの？

今はそんな事しか頭に浮かばなかった。

花火 私の恋（前書き）

文章変ですいません

## 花火 私の恋

「よーし!!じゃっ花火やるぞー!!」

「やるぞー!!」

という榊君の掛け声で花火は始まった。

榊君と鈴と優砂…

変なメンバー…。

相変わらず鈴は何を考えているかわからない。

榊君はただ単純に花火がしたいようだ。

そして…優砂は、鈴の考えがわからなくて混乱していた。

やっぱりメールしてるんだ…

さかも花火の約束までして…

なんか苦しい。

嫉妬…

優砂はこんな思いをしなくなかった。

しかも大切な友達に…

この嫉妬を押さえる為には一つの可能性にかけるしかなかった。

『鈴が無理やり榊君を誘った』

これが本当なら、この心のモヤモヤは消えるだろう。

確かめる為に右手でキャミの裾を掴み言った。

「てか、まだ五月なのになんで花火なんだし！！　だ、誰が言いだしたんだよ〜！！」

言った！！

心の隅で願う。

誘ったのが鈴でありますように…。

「だってえ！！メールしてたら榊君がやりたいからやろうっ！！っていきなり言い出したんだもん！！」

心の奥で何かが崩れるような音がした気がする。

涙が出そう。

悔しい。

なんで鈴なんだろう…

なんで優砂じゃないんだろう…

優砂だってメールしてんじゃない。

最近よくメールしてたじゃん。

でもここで泣いたら負け。

負けたくない。

「ふーん！！本当子供みたい！！笑」  
無理やり笑顔を作る。

作り笑いだってわかってるかもしれない。

でも今は夜の闇が消してくれる。

「なんだよー！？じゃあ花火嫌いなのかよー??」

好きだよ。

好き。

例えば花火に一番に誘われなくても…

好きだよ。

「…好きだよ…」

「ならいいじゃん ほらやるぞ！！」

今はまだ花火にも誘ってもらえないけど

柊君が好きなの。

鈴なんか気にしない。

私の好きな気持ちは変わらないから…。

100ショットの花火なんか量が少ないからあっという間だった。

「よし！！最後線香花火！！」

パチパチ

例え…

「あ…落ちた…」

この線香花火が終わってしまってもまだ私の恋は終わらないから…。

「んぢゃ！！そろそろ帰ろっかあ」

「だなあ！！」

時刻は10:38。

はい。完全に親に怒られるー。

でも…

榊君にあえたから…

いつか

3人は帰る為にもう誰もいない、真っ暗な道を歩いた。

「あー楽しかったあー!!」

「なー?花火楽しいだろ?」

「うん 楽しかった!!」

「またやろうな!!」

「う、うん!!」

この言葉は優砂と鈴に言ったんだ。

でもまるで優砂だけに言ってくれたみたいに聞こえて耳が赤くなる。

「俺こっちだから!!」

右を指す。

「私は左い」

「優砂は真っ直ぐ!!」

みんな見事にバラバラ。

「バイバイ!!」

一斉にバイバイを言って、このプチ花火大会は終わった。

「明日は花火の話題で色々話せるよなあ」  
「優砂はお風呂に入りながら考えていた。」

「明日は花火の話題で色々話せるよなあ」  
「優砂はお風呂に入りながら考えていた。」

案の定、親には怒られたけど、幸せだったので、特に反抗もしなかった。

そして優砂はその幸せを忘れないまま眠りについていった。

「おはよ〜」

「おはあ」

柗君はまだ来ていないようだった。

（まだ来てないのかあ）

よし！！話すぞ！！

という気持ちで来た、優砂にとっては少し力が抜けてしまった。

担任の先生が教室にきた。

そして後ろから榊君が走り抜けてきた。

（きた！！）

しかしもう先生が来ていてHRが始まってしまうので、もちろん話す時間はなかった。

そしてHR後すぐに一時間目。

席が離れているので話せない。

1、2時間目の間の休み時間。

ロッカーに行ってしまったのか教室に姿がみえない。

3、4時間目。

選択授業の為教室移動。

…話せない。

お昼休み。

榊君はもちろん男子のグループで食べてるので話しかけにくい。

5、6時間目の間の休み時間。

6時間目の用意をしようと前のドアに向かう榊君。

すると鈴が彼を呼び止め何かを話しかけていた。

きつと昨日の話題だろう…

…結局、今日一日優砂と榊君は会話する事がなかった。

優砂の心に新たな

『焦り』

という感情が生まれた。

そしてその『焦り』がこれからの優砂の高校生活を左右する事件をおこしたんだ。

放課後・部活〓チャンス？（前書き）

短くなっちゃった

## 放課後・部活Ⅱ チャンス？

「あれえ？鈴帰えんのお？」

パタパタと廊下を走る鈴を優砂が呼び止めた。

「うん！バイトなんだあ」

「折角遊んでもらおうと思ったのにい」

「ごめんねえ また今度！！」

放課後は夏菜穂も由海も部活に行ってしまう為優砂の相手をしてくれるのは鈴ぐらいだった。

「んゝまたねえ」

しかたなく優砂は教室へと戻った。

「あゝあ！みんな帰っちゃったあゝ」

つまらないなあゝ

と教壇に座って遊んでいた。

『ガラッ』

先生かと思った優砂は窓の方を向いたまま飛び下りた。

「スイマセン！！」

「オレだよ」

「はれ？さ、榊君？」

「先生かと思ってドキッとしたでしょ？」

「う、うん」

先生よりも榊君が来た事にビックリだよ…

「なにしてんの？部活は？」

「…やめた」

やめた？

「ええ！？なっなんでっ！？」

「バイトやりたくてさあ…」

「バイト？またなんで急に？」

「携帯新しくしてえんだよ」

「ふうん…」

ま！私には関係ないけどお！

という冷静な顔を見してみたが、本当は心の中は盆踊りだった。

…だってさ…やめたって事は放課後遊べるチャンスができた…  
って事だよ…？

「んでやめたからお前に言いたい事があるんだよ…」

えっ！？えっ！？まさか！？

こ、こ、こ、告白！？

「バイト先を紹介して！！」

はい…期待ハズレ

「バイト先い？そんなの自分で探しなよ」

「んな事言わないで頼むよ」

「だって紹介って言ったて、優砂のバイト先パン屋だよ？なに？パン屋で働きたいの？笑」

「…いや、そーいうわけじゃないけど…初めてだから…ーいづのよくわかんねえんだよ」

なんか可愛い〜笑

「ん〜やっぱバイト情報誌見るのが一番だと思うよ〜？」

「あーやっぱり？」

キーンコーンカーンコーン

『下校時刻になりました。生徒のみなさんは…』

「ありゃ〜もおこんな時間かぁ」

「本当だ〜よしっ学年主任がこないうちに帰るかぁ」

「だねえ」

普通の会話。

…でもね教室にはもう優砂と榊君しかいないの…

…それってつまり…

2人で帰る…って事？

心臓がやばい…

やばいって！！！！

しかし、ここは冷静なフリ…

何食わぬ顔で自転車に乗る。

この気持ちはまだバレてはいけないから…

「榊君。いつもどっから帰ってんの？」

「え？普通に右から。」

「右？遠回りだよ！！」

「んな事ねえって！！まじ近いからっ！！」

「あはは〜嘘お〜」

超楽しい…!!

しかもこんな風に制服で自転車で並んで走っていると…

カップルみたい…照

…でもねえ…優砂は一つだけ聞きたい事があるの…

あー聞きづらい…!

どーしよ…!

バレないよね!?

こんな事聞いたらバレるかなあ…

でもここは勇気を出して…!

「…榊君てさあ…好きな人いんの??」

今回のコンセプト…

興味本位のハデめ系女子

「…いない」

こっちを見ないで一言言い放つ。

え？お…怒った？？

「……………」

嫌われたかも…

もうショックで言葉も出ないでいた。

「おい」

きつと『お前ってウザいな』とか言われる…

どーしょー！…！…！…！…！…！

しかし黙ってるわけにもいかず泣く泣く返事を…

「…はっ…！…はい…！…」

「黙んなよ」

「へ？」

「いきなり黙んなってんのー！」

「へっ？なんで？」

「…照れんだろ」

そう言いながら振り向いた榊君の顔は…

夕日と同じ朱色だった。

…照れてるだけだったんだ…

「だから黙んなってのー！」

「ごめんごめん」

やっぱり可愛い…笑

そして怒ってなくて良かった…。

気付くとそこは仲美納公園前…

（あゝもつすぐ終わっちゃうなあ）

と思いながら公園を通り過ぎようとする。

キキイ！！

「どしたの？」

突然ブレーキをかけた榊君。

「公園

…寄ってかない？」

…そう…恋は、嵐の如く。

帰り道〓再確認(前書き)

はぁぁぁ…今回も短く…スイマセンです( ; ; )  
| ; ; )

## 帰り道〃再確認

仲美納公園は、すべり台、砂場、ジャングルジム、そしてブランコ、  
というような素朴な普通の公園だ。

「誰もいないねえ……」

「もう六時だからなあ」

…っ！！話題が…！！

ない！！！！！！！！！！

「と、とりあえずブランコにでも座る？」

「ん〜」

（ ”ん〜” だけじゃあ話が續かないよ〜！！ ）

沈黙がづらい。

ブランコに座りキィキィとこいでみる。

「懐しい〜オレ小さい頃毎日の様にここ来てたよ〜」

「うちも！！桜の花とか摘んで怒られたあ〜」

「いや！！そんな事はしてない！！笑」

「えっ！？うちだけっ！？」

自然に会話が繋がる。

自然と笑顔がこぼれる。

あなたの笑顔。

好き過ぎて苦しい。

言いたい。

『好き』って。

…でもね…

言ったらあなたはどんな顔をする？

哀しい顔をするでしょ？

あなたの哀しい顔は見たくないの。

今はまだあなたの笑顔を壊したくない。

だから決して言わない。

悟られない。

「悟られない」

「じゃな————い——!!——!!」

「鈴!!——静かに!!——!!」

昨日は8時まで楽しくお喋りした。

もちろん恋バナとかじゃない。

中学の事。

ムカツク先生の事。

バイトの事。

「あつ！親からメールだあ 帰って来いだつてえ」

「あーもう9時だもんなく帰る??」

「うん ごめんね〜」

母を…呪いたい…

「よしっ帰ろっ!」

といつても帰り道は一緒だった。

「じゃなっ!」

「ん…バイバイ!」

本当ならテンション下がって声も低かった。

でもそれじゃ榊君にバレちゃうから無理やり声を明るくして、その日優砂は榊君と別れた。

「いや!だからバレないっ!!バレないって!」

「えっ!?!なんでよ!?!普通バレるっしょ!?!」



「でもスゴイよねえー二人で帰って…二人で公園行く…なんて…」

「いや…なんか流でえ…」

思い出すとニヤケそう…

「後ねっ！！好きな人いないんだって！！」

「やったじゃん！！チャンスだよ！！」

「いや無理だからあゝ」

「弱気になんなっ！！」

弱気…ってわけじゃないんだよ…

「後っ……………」

「ん？後なに？」

「胸をはってこの人が好きって言えるようになった」

「なんじゃそりゃ？ノロケかあ？笑」

次の授業の準備の為、鈴はロッカーに向かった。

ノロケじゃないよ。

本当なの。

前は、好きだけど迷いがあった。

そう。迷い。

この人を好きでいていいのかな？

きっと叶わない。

結ばれない。

だから、もっと簡単な人に恋したほうがいいんじゃないかな？

そう思ってた。

でも今は胸をはって言えるの。

榊君が好きですって。

今は友達でいたい。

でもいつか言わなくちゃいけない日が来るだろう。

その日までこの思いを心の隅に置いておこう。

いつか来るその日まで。

「授業始めるぞー」

「…しまったロッカー行くの忘れた…」

恋も大切だけど…

勉強もね……………涙

帰り道〓再確認(後書き)

この後ロッカーに教科書を取りに行かなかった優砂はどうなったか  
って?…笑

優砂は運悪いんだよねえ…ワラ

## バイトくテスト(前書き)

更新遅れました!!

しかし今回わ長く…

駄文ですがよろしくお願ひします!!

## バイトくテスト

それはある帰り道の事…

「優砂勉強してる?」

甘菜の一言。

「受験以来ほとんどしてないけど?」

「やってないやってないって言いつつやってんでしょ?」

「っだーしっこいなあ!!テストでもあるまいしやってないつうの  
!?!」

「…え?」

甘菜の顔が笑顔から真顔になる。

「なに?どした?」

「優砂…もしかして知らないの?」

「はっ!?!なにがよ?」

「…来週中間だよ…」

中間…

ちゅうかん。

チュウカン。

CHUかん

「……りありー？」

混乱して中途半端な英語に……

「い、いえす」

そう……テスト……

うちの学校は来週中間テストだったのです。

「なんでっ！？なんでしらないの！？先週の朝のHRで言ってたじやんー！」

「えっ！？嘘！？先週！？……先週………あ……」

「先週遅刻したわ……」

「あれだけうちが朝早く起きろっていつてんのにその忠告を破るか  
らだよっ！……！」

「だってしょうがないじゃんっ!!その日たまたま寝坊したんだから!」

「…はあ」

深い溜め息。

「な、なによ。」

「とりあえず帰って優砂は勉強しな…赤点とつたらまずいでしょ」

「うん…そうだね…って今日バイトだよ…」

「しばらくバイト控えたら?バイトとテストどっかが大事なの?」

「バイトとテストならテストだけ…」

「?」

「金とテストなら断然金なんだよね…」

「帰ろ。」

バカらしいわ…  
という顔だった

「おはようございます」

「おおおはよー」

小さいパン屋さん小さいけど味は最高のパン屋さんに私はつとめて  
いる。

時給はめっちゃ低いかな…

「あのー店長ーちょっと相談があるんですがあゝ」

「なに？」

「実は再来週からテストなので…休みがほしいんですが…」

「あーテストかあ…」

「はい」

「いいよ。勉強に集中しな！」

店長は優しい人だった。

…忙しくない時は…

「という事で私は長い休みをもらいました!!」

「本当にあなたはバカねえ…」

夕食の煮物の里芋を箸で転がしながら言う母。

「しょうがないじゃーん!!寝坊したんだから…」

「朝あんだけ起きろって言ったでしょ!!」

「……………」

甘菜と同じ事言ってる…

「…とりあえず勉強して赤点取らないでよ!!」

また同じ事…

「はいはい!!わかってますー」

あー勉強したくねー

「ごちそうさま!」  
カチャンと箸を置く。

したくないとは言っても赤点をとるわけにはいかないのととりあえず机に向かってみる。

「…まず数学…」

因数分解の利用。

Xの着目。

展開…

「…あ!結構数学はわかるわ!」

「…え!あれ!…違う!…えーなんで!」

「うるさい!…!」

「あ!…!ごめんっ」

時刻は12:00過ぎ。

こうして私の恐怖のテスト期間が始まった…

「…あれえ？できたと思うのに間違ってる」

3：15

夜は更けあたりは闇に包まれている。

「…また違う」

なんどやっても問題が解けない…

焦りを感じてしまう。

「どうしよ…全然わかんないよお…」

しかも一番得意な数学がわかんないって事は

大の苦手の古典とかは…

恐怖が頭を過ぎる。

「…っまあ！！とりあえず数学頑張ろう！！」

気を取り直してまた問題を解き始めた。

「…えっと…ここに×の二乗があるか…ら…」

ピュピュピュ  
ピュピュピュ

「…えっ!?!?」

周りを見渡す。

優砂は机に座ったまま。

「あたた…腰が…」

お母さんはいない。

机には書き置きが。

『今日は会社の研修だから先に出ます。』

「あ、なんか前に言ってたなあー」

ふと時計を見る。

「……………!?!」

時刻… 8 : 4 5

「…ええ〜。一時間目始まってるんすけど」

また遅刻かあ…

と呟いて優砂は学校へと向かった。

「おはようございます」

思いつきりドアを開ける。

一斉に振り向くみんなの目が怖い。

野生のチーターみたい…

見たことないけど。

「おはよ〜」

夏菜穂が振り向いて言う

「おは〜」

一時間は

大嫌いな古典。

「休めば良かった…」

古典は授業の内容がわからないというのもあったが…

なにより先生が嫌いだった。

「伊那丘さん!!」

「…はい？」

話しかけられ不機嫌な声になる

「なんですか!?!その態度は!?!遅刻してきてプリントも取りに来ないで!!」

「あゝスイマセンスイマセン今取りに行きますよっ」

椅子から立ち上がった時ガタンと大きな音を立ててしまった。

「乱暴に扱わないで!!」

高い声が寝不足の頭に響いて痛い。

(わざとじゃないんですけど)

ツカツカとプリントを取る為に前が出る。

「はいっ！…！プリントっ！…！」

私の目の前でひらつかせる。

「…」

寝不足で遅刻した上にこの先生の声を聞いた優砂は不機嫌度最高潮だった

パシンっ

思いつきりプリントを奪いとった。

クラスもシーンとなる

「っくく伊那丘さん!!あなたって人はっ…!!」

キンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り響く。

「あ…授業終わっちゃたあ」

「…!!授業を終わります!!」

号令もかけないで教室を飛び出して行った。

「優砂あ〜いいのお?あんな事しちゃってえ」

席に戻ると悪魔的なほほ笑みを浮かべて夏菜穂が聞く。

「だっつてございかったいい」

「いやあわかるけどさあ」

優砂は眠くて眠くてもう話の内容が頭に入ってきていなかった。

でもその夏菜穂の一言だけは頭に残ってる。

『目え付けられても』

知らないよ?』

あの時の夏菜穂の言葉をちゃんと聞き入れていればきっとこんな事には

ならなかったんだ。

## バイトくテスト（後書き）

…私の私生活で事件が…

その為全てがノンフィクションではいなくなってきました

しかし頑張って面白い恋愛物をかいていきたいと思うので次回もよろしく願います！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6661a/>

---

高校同好会!!

2010年10月21日01時43分発行